

非科學時代の迷信

森 信壽

一、轆轤頭

轆轤首とは大槻博士が言海に『にけくび妖怪の名頸甚だ長く伸び縮みするものと云ふ』と説明されてゐるが、尚一層廣義に解して「頭首が軀幹を離れて遠く飛去するもの」を包含してよからう。

支那の書籍には多くこの記事が載つてゐる、即ち「南方異物志」には『嶺南溪峒中有飛頭蠻者項有赤痕至夜以耳爲翼飛去將曉復著體』顧秉謙の三才圖會には『大閩娑國中有飛頭者其人目無瞳子其頭能飛其俗所祠名曰蟲落因號落民』(寺島良安の和漢三才圖會には此條を引き其國中人不知悉然也)とある「明史」占城の條下には『有尸頭蠻者一名屍致魚本媚人、惟無瞳神爲異夜中與人同寢忽飛頭食人穢物來即復』(「博物志」「西陽雜俎」に引くところも大同小異である)以上引くところの記事を概括すると南方なる一蠻民に飛頭蠻若くは落頭民等と名けらるゝものがあつて、此ある民族では、その頭首が夜に入れば抜け出で耳を以て翼とし、諸々を飛翔し虫類を採り食ひ曉となると歸り來つて元の如く軀幹に附着すると云ふのである。

扱此飛頭者の頭首が軀幹より離るゝ前後の状態は「太平廣記」に『飛頭獠、善鄯之東、龍城之西南地、廣千里皆爲墾田行人所經牛馬皆布氈臥焉。其嶺南溪峒中往々有飛頭者而飛頭一日前頸有痕、匝項紅縷妻子看守之其人及夜。狀如病。頭忽離身而去。乃于岸泥尋蟹蚓之類食之將曉如夢覺其實矣』一寸精神病學から云ふ睡游症のやうなものであらう。

又この飛頭の者は鼻から水を飲むと傳へられてゐる。龍威秘書中の「輟耕錄」に元の陳孚が安南へ使せし時の詩句を載せて曰く『鼻飲如瓠甌首飛似轆轤と「百物語評判」に之を和譯して『南蠻の人には「ろくろ首ありて、釣瓶をおろしあぐるが如し」と蓋し轆轤首てふ名は是等から由來してゐるのである。この外惟り頭首のみでなく両手亦飛去し而も各相異りたる方面に飛ぶと云ふ記載がある。王子年が「拾遺記」に『漢武時因墀國南方有解形之民、能先使頭飛南海左手飛東海右手飛西海至暮頭還肩上海風飄於海外』など出てゐる。



吾が國でもこの飛頭人が「肥後國しころ村」といふ處に存在したとのこと、一二の書に散見してゐる。即ち「百物語評判」に『此頃絶岸和尚といふ僧西國行脚の折から肥後へ行て、しころ村といふ所に一宿せられしに軒あばらなるかり枕、風冷しく吹落て夢もまどらかならざりければ夜更まで念佛稱名して居たまひしに、うしみつばかりに其屋の女房の首むくろよりぬけて、窗の破れより飛出ぬ。あやしと思ひて念頃に見れば其首の通ひしあとに白きすじのやうなるもの見えたり。是こそ轆轤首よとおそろしく、誠に過去の業因までおしはからるゝに夜明かたになりて其すじ動くやうにて又もとの處より彼首かへり、につこと笑ふやうにておのがふしどに入ぬ。夜明て其女房を見れば、首のまはりに筋あるやうにて別のかはりなし』とある。又「怪談諸國物語」に彦山の勝鬼坊といへる修験者が寰島殿息女の離魂病をば加持の行法にて治癒せしめた際。其經驗談を物語る條に『さればそれがしとせはだかじまへまかりぬるに、しころ村奥原休藏がもとに一宿仕りに、うしみつの頃休藏の妻のくびぬけ出で、白き絲を引てまどより行衛しらず、明がたに此くびかへり、につこり笑ふが如くおのがむくろにおさまりぬ。あるじと年ごろかたりぬる中なりければ、ひそかにしらせ、

拙僧かぢの力をもつて、かさねて試し見るにあやしき事さらに無し』とある。

次に第二類の頭首が單に伸長し得るのみの者に就て言つて見やう。吾が國での轆轤首は多くこの種のもので飛頭蠻とは別種のものであるのを往々之を混同して説てゐる。

伴蒿蹊は「閑田耕筆」に『世に轆轤首といふは一種の奇病とす。或は是を飛頭蠻に混じて數丈の間を徘徊するなどいふ(中略)おのれ此形狀を思ふに(中略)もとより飛頭蠻の話の如く數丈延て押下に登るなどやうのことはあるまじきことなりと説き其區別あるを認め猶實驗例を記るしてゐる。曰く『俳諧師の遊蕩一音といへる男正しく見たる話あり。其若き時江戸吉原にして一妓容貌美なる者を見て即ち相〇し、朝に歸るさ友人のもとへ立より此美顔を選び得て〇することを誇りしに、集ひたる二三の少年ども皆掌を拍て笑ふなぞといへば、子しらずやそれはろくろ首の名有り、何のあやしきこともなかりしやといふ、一音初は戯言なりと思ひてあらがひしかども、友人皆その聞くことの遅きを嘲りて止ねば、さらば急に實否を見はてんといひて其席より引かへしてかしこにいたる(中略)さて遊び戯れあまりに酔て一夜よく寝ねて明はてぬるにかくながら歸りては、友人の爲にいふべき詞なしと思ひて、又其日もそこに暮し、此夜は先の夜に懲て酔たるふりしながら露ばかりも眠らず窺ひしに妓は馴れてや心解しにやあらん熱く眠りぬ。夜半過ぐる比ほひ一音眼を開て見れば其首枕を離るゝこと一尺計にして垂れたるに、心得ながらもおどろきてかけ出で(下略)』とある。(以下次號)雑誌「風俗研究」十五(大正七年八月十五日發行・芸艸堂)

非科學時代の迷信 (承前)

森 信壽

轆轤頸

橘南谿の「北窓瑣談」に『越前國敦賀原仁右衛門といへるは余が多年懇意の人なり。此人用の事ありて、數月京へ登り居り留守の事なりしが、其妻千代といへるが二歳になる岩松といふ小兒を養育し下婢一人召遣ひ居けるに主人旅行の留守なれば外に男子もなければ淋しとて、又一人二十六七歳許なる下婢をやとひ留守を守り居けり。寛政六年西十月の事なりし、夜更て彼下女殊の外に呻きければ妻も目覺めて持病に痰強き下女なれば又痰や發れる尋ねばやと思ひしに、枕もとに在ける有明の燈火消居ければ、小兒を懷に抱ながら起出で、燧をうち有明の燈火を點じ下女がいねたる次の間の障子を開きたるに、下女が枕もとの小屏風の下に何か丸きもの動きて見えければ何やらんと有明の燈火をふり向け見るに、下女が首引結髮のまゝにて屏風の下に引添ひ一二尺づゝ屏風へ登り付ては落ち登り付ては落ちる程に、妻も見るより膽消魂飛で氣絶もすべく覺しが小兒を抱き居ければ驚かん事を恐れ右の手に小兒をかゝへ、左の手に有明の燈火をさげて其儘に居すはり暫くは物も言はで有けるが彼首毎度屏風へ登り付ては落ち／＼してつひに屏風を越えて内に入り、又下女がうめきおそはるゝ聲聞えし妻は下女をも起し得ずして其儘に障子立て又我閨に入りて、夜明るまで目も合はず蒲とんを引被き居て、夜の明るを待ちかねて、里方の大坂屋方へ人して急に兄の長三郎を呼びしか／＼の事のかたり、何となく他の事に寄て下女にいとまやりぬ(中略)』唯京に居ける夫仁右衛門へ此事告來るついでに余が多年親しき事なれば文して委しく申し來れり。後に其妻も京に上り住ければ、余も直に猶委しく聞けり。夢幻などの事にては無く正しく轆轤首を見けるもいと奇怪の事なりける』とある。轆轤首の本體は「閑田耕筆」に『おのれ此形狀を思ふに轆轤の名の如く頸の皮の屈伸する生質にて心ゆるぶ時は伸る也病にはあらじ』と伴蒿蹊は云はれてゐるが、之れは、

人體の解剖。生理を無視した説で、又『余此事を後につく／＼考ふるに妖怪にては無く、病の然らしむる事なるべし。痰多き人は陽氣頭上にこずみ、其氣形を結んで首より上に出るなるべし。其人の寝たるを見れば正眞の首は其儘身に附て有べし。離魂病の類なるべし』と南谿の説明は漢法者流の陰陽説である。兎も角も飛頭蠻なる異人傳説が支那の小説となつて本邦に輸入しそれが國民傳説に化したので、一概に錯覺や幻覺を以て研究するにも當らぬであらう。

次回は「蜘蛛の精」に就いて述べやう。(この稿終り) 雑誌「風俗研究」十六(大正七年十一月十五日發行・芸艸堂發刊)

《HP 参照「ろくろ首」》[「ろくろ首」](#)。[十返舎一九『列国怪談聞書帖』「ろくろ首」](#)。
[飛頭蛮\(ろくろくび\)](#)。[図版 6-3. 土蜘蛛とろくろ首](#)

[萩原義雄入力]